

思ひ草

第13号

平成26(2014)年2月28日 発行

支え合い ～「先生ありがとう…、みんな元気で…」～

人間開発学部長 しんとみ やすひさ 新富 康央



「私にとって、これが最高のスピーチでした」。年度末になると、ある中学校教師が聞かせてくれた担任生徒の卒業3分間スピーチを思い出します。それは、「先生、ありがとう…。みんな元気で…」という、涙声でほとんど聞き取りにくい、一人の男子生徒の卒業スピーチでした。実は、彼は中学2年生まで、不登校を繰り返していた生徒でした。

給食の時以外、腹痛を訴えて逃亡する級友。しかし、教師は率直に彼の家庭事情を伝え、心の分かち合いを求めました。

両親が居なくなり、家は祖母と弟だけ。床にはカップ麺の殻が転がっている。彼にとって給食だけがまともな食事だ、と。

給食は食べに来るのに、腹痛を理由に帰るのは、わがままでずると、彼を嫌っていた生徒たち。その彼らが変わりました。給食の残りを弁当箱に詰め、家族へと、彼に渡すようにさえました。これが、彼の涙の卒業スピーチとなったのです。

この先生の教育にかける思いが「互いに支え合う学級」、即

ち支持的風土(supportive climate)の学級づくりでした。先生は常に「支え合い」を呼びかけていたのです。それ故に、彼らは嫌悪、排斥から、支持、支援へと変容したのです。

相手の身になって、その思いや願いをくみ取ってくれる子ども、相手の良いところを見つけ、励ますような子ども、教師に褒められた級友に対して「良かったね」と素直に言える子ども。今日、子どもたちのこうした支持的な人間関係が見られなくなって久しいと言われます。逆に、いじめ問題に見られるように、他を排斥する、とげとげしい防衛的風土の人間関係が横行しています。下校時の挨拶で、「死ぬ」「殺す」「うざい」などと交わす風景すら見られるようになりました。

「摂在」を「尊在」に変える、「人間開発」の教育者をめざす本学部の卒業生たちは、子どもたちが安心して過ごすことのできる「居間(リビング)の教育」(J. ペスタロッチ)、すなわち支持的風土の学級づくりに励んでもらいたいと願います。

学校での実践体験を学びに

人間開発学部助教 いとう ひでゆき 伊藤 英之



今年もたくさんの学生が、教育実習や教育インターンシップ、また、教育ボランティアによって、学校現場を体験してきました。小学校6年間、中学校3年間、高校3年間そして大学と、これまで長い年月を「学校」で過ごしてきた学生たちにとって、これらの実習は、「児童・生徒・学生」という立場ではなく、初めて「教師」という立場で過ごす時間になったのではないかと思います。その時間の中では、授業を行うための準備や授業を展開すること(これは教育実習だけですが)、児童や生徒としっかり向き合うこと、様々な学校行事に関わることなど、今まで学生たちが知りようもなかった学校現場の大変さや難しさに直面し、教師という仕事の厳しさを痛感してきたように感じました。しかしそれ以上に、学生たちは皆、この厳しい仕事に実習に行く前にも増して魅力を感じたようで、「今の自分に何が足りないのか」ということに真剣に向き合い、「教師になる」という自身の目標に向かってますます努力する姿勢が様々なと

ころから見て取れました。

私は、今年度から健康体育学科の教育インターンシップと教育実習の担当することになりました。学校現場での実習を終えた学生たちの成長ぶりを目の当たりにし、現場を知ることが計り知れない教育効果をもたらすことを改めて実感しました。

実習の持つ教育効果をより高いものにするためには、「何のために実習に行くのか」、「実習では何をしてくるのか」といった目的意識や課題意識をしっかりと持たせて実習に送り出す事前指導と、「何ができて何ができなかったのか」という振り返りとそれに基づき「これから何をすべきなのか」という課題設定を行う事後指導を充実させることが大切だと考えます。これからも、学生たちがより一層充実した実習を行い、その経験をしっかりと活かしていけるように精一杯サポートしていけたらと思います。

平成25年度國學院大學「特色ある教育研究」 『「人づくりのプロ」を育てる学部教育のあり方』とは

学生に育てたい資質能力

人間開発学部 初等教育学科 教授 成田 信子



「教育実習」が終わり大学に戻ってきた学生の表情からは、何事かをなし得た充実感がうかがえる。実習を終えた学生に出会うとつい「どうだったか」と訊きたくなるのだが、「教育実習」は「どうだったか」と単純には総括できないものである。臨床科目がもつ複合的総合的な教育力が学生を伸ばし育てている。大学の教員養成課程において、「教育実習」が中核をなす科目であり、最も学生を伸ばし育てる科目であるという感触は、学生、教員の多くが共有できるだろう。

では「教育実習」以外の教職科目は、どのようなねらいをもち、「教育実習」とどのようなつながりをもっているのだろうか。平成25年度の國學院大學「特色ある教育研究」では、各科目が学生にどのような資質能力を育てているのかについて、学生・教員双方にアンケート調査を行った。先行研究を参考に、資質能力を28項目(注1)に分けて6件法(とても当てはまる～全く当てはまらない)で調査した。各科目を担当する教員の意識と受講する学生の意識を探ることで、本学部の小学校教員養成のカリキュラムの特徴をあぶりだすことが目的である。

25年度前期開講の13科目を、科目特性によって4つの科目群(第1～第4の科目群)に分け、科目群間の比較・分析により、各科目群の傾向をみた。

- 第1 科目群 (指導法、臨床教育科目以外の教職専門科目) 教職論 特別活動の理論と方法 発達と学習 教育相談
- 第2 科目群 (指導法の科目) 児童英語基礎指導論 初等科教育法(国語) 同(社会) 同(算数) 同(体育) 同(理科)
- 第3 科目群 (臨床教育科目) 教育実習 I A
- 第4 科目群 (その他の教職関連科目) ボランティアと社会参加 人間開発基礎論

学生の調査結果をみると、各科目群が重視しているのはおおむね次のような観点である。

- 第1 科目群：子どもの発達・成長、対人的態度の形成、児童(学習者)理解
- 第2 科目群：学習指導要領、学習指導
- 第3 科目群：学習指導
- 第4 科目群：子どもの発達、地球規模の問題

後期科目も合わせて分析しなければならないが、学生の調査結果からは科目群によって育てている資質能力に違い

があること、ひとまずはそれらは相互に補完しあっているとみることができ。課題も見えてきている。一つ挙げれば「教育実習 I A」(事前指導)は、「学習指導」という観点のほかに重視すべきところはないのだろうか。本学部は教育実習 II III(参観実習、教壇実習)を3年次に配置しているために、教育実習 I Aを2年前期にもってきている。他の必修科目の内容を取り扱わざるを得ないところから「学習指導」に重点があるという結果につながっていると考えられる。科目の配当時期の問題、内容の問題を精査する必要があるといえるだろう。

このような調査は、大学の教員養成課程でなにをどのように積み上げていくのがよいかを検討する材料である。またもう少しマクロな視点で見れば、養成段階としての大学、採用段階として各教育委員会、現職研修段階としての教育現場等、関係機関がそれぞれ望まれる資質能力を明確にし、育成方法を確立していくための基礎データといえるだろう。

注1 調査した28の資質能力

問1 学習指導要領の内容を理解している 問2 各教科の専門的知識を身につけようとしている 問3 子どもの体と心の発達について専門的知識を身につけようとしている 問4 子どもの発するサインがわかる 問5 育てたい子ども像をもっている 問6 子ども一人ひとりのよさや多様な能力が理解できる 問7 1時間の授業のねらいを明確にして学習指導ができる 問8 子どもに学習課題を持たせる指導ができる 問9 情報機器が活用できる 問10 すべての子どもに平等に接することができる 問11 子どもと対話的にコミュニケーションができる 問12 社会人として常識や良識、ルールを遵守し、適切な言葉遣いができる 問13 人権感覚をもって人と接することができる 問14 地球規模の問題へ関心をもっている 問15 多様な考え方・見方を受け入れられる 問16 子ども一人ひとりの個性を大切にしている 問17 人間的な温かさ、親しみやすさ、ユーモアをいつも持っている 問18 教育者としての素直さ、謙虚さをもっている 問19 教職に対する強い使命感がある 問20 誇りと強い意志をもって教育にあたらうとする 問21 積極性がある 問22 常に学び続けるという気持ちをもっている 問23 より高い目標にチャレンジする意欲がある 問24 子どものために惜しみない支援をしていくことができる 問25 子どもの成長に喜びが感じられる 問26 広い一般教養がある 問27 他者と情報を共有しようと努める 問28 相手の立場を理解しようと努める 円滑的な人間関係が築ける

教育インターンシップ

先生方や子どもたちの姿から多くのことを学びました

私の教育インターンシップ

健康体育学科 2年 小林 水友

私にとってこの「教育インターンシップ」という活動は2年次において最も大きな学びの場であったと感じます。この活動から児童に対しての指導に関して目に見えるほどの自分自身の大きな成長はないと思います。しかし、これから教職を目指していく中で大切なことを感じ、気づけたということが一番強く実感しています。

私は特別支援級の児童を支援することを中心に活動してきました。通常学級の授業へ参加する際の支援や個別と一緒に課題に取り組むことをしてきました。普段どおりに通常学級の授業でも積極的に参加できるようにはどうかと思ひ、寄り添いながらもいろいろな声のかけ方や取りませ方をしてみました。その児童は、授業で上手く発表するまではいきませんでした。問題に対して自分の答えや考えについて笑顔で話してくれるようになりました。児童を支援することを通して、改めて難しさを痛感させられました。

上手くいかなかったことのほうが多かったのですが、児童の反応を見ながら動くことや先生方に相談してきたことは大きな経験だと思います。何よりも児童と関わっていく中での笑顔や「ありがとう」の一言がすごく心に響いていて、これが先生方からよく耳にする「やりがい」なのだろうと感じました。

この他にも学んだことも多く、書き記しきれないとしか言いようがないのですが、これから学ぶべきことはもっと多くあることに気づけました。教員を目指す立場で見る学校現場、子ども、そして教師の姿は、自分が小学生の時に見えていたものとは違い、また普段の講義だけでは感じ取ることのできない体験がとても新鮮で毎日が自分にとって刺激となっていました。この活動で感じた素直な感情を大切に抱きながら今後の教育実習を始めとした教師への階段を踏みしめていきたいと思っています。

第2回教育インターンシップ連絡協議会開催

平成25年12月6日(金)、第2回教育インターンシップ連絡協議会を開催しました。今年度は、教育インターンシップ報告会の充実と、学生と受入校の先生方との交流の充実を目指し、グループ別の意見交換の時間を採り入れました。

学生からの活動報告を受けて、それぞれの課題をもとに、小学校、中学校、幼稚園の校種別グループで交流を深め、受入校の先生方から直接ご指導を頂くことができました。

活動報告は、初等教育学科2年の塚原未来さんと加藤綾乃さん、田屋裕貴さん、近藤麻奈美さん、川津由梨乃さん、健康体育学科2年の原麻綾さんと3年の戸村栄介さん、松村寿春さん、藪真千さんの9名が行い、自分自身の学び、教職への思いなど、それぞれの経験をもとに報告がありました。



「子どもとのかかわり方」をテーマに、グループ別に活発に話し合いが行われた後、横浜市立新石川小学校の片山博文副校長先生と黒須田小学校三山久美子先生と美しが丘中学校の小山森義先生から、具体的にお話をいただきました。

「子どもとかわるときは常に問題意識を持ち理論と結びつけることが大切。」「子どもとかわるとき、初めてのことで『分からない』と思ってもやらなければならない。仲間に聞く、先輩に聞く、ただしやるのは自分。そこを崩さないようにする。」「目の前の子どもがどうすれば成長するか幸せになれるか、相手の気持ちを感じる事が大切。」等、先生方の経験をもとにしたお話から、子どもとかわる姿勢についてヒントになる言葉をたくさんいただきました。



教育実践総合センター夏季教育講座 8月7日(水)、理科教育実践フォーラムを行いました

先生の「理科の苦手意識」を減らすために

初等教育学科 准教授 寺本 貴啓

ベネッセの調査によると、国語や算数は経験年数を重ねるごとに「指導が得意」と答える教員が増加していますが(国語：5年目以下40.9%、31年目以上77.1% 算数：5年目以下71.8%、31年目以上90.5%)理科では、経験年数にかかわらず苦手意識が強いようです(5年目以下38.9%、31年目以上40.5%)。私はこの結果の原因を、教師の力量というより各単元教材に対する関わりの少なさ、つまり「経験不足」であると考えています。この経験不足から理科の実験や指導に対する苦手意識や不安感が高まっているのではないのでしょうか。

理科は先に述べた国語や算数と比べ、例えば、3年生で磁石、4年生で状態変化、5年生で振り子、6年生で月と星、のように、単元ごとに全く異なった自然事象を対象にして学習します。したがって、同じ理科でも単元や学年によって実験道具や実験方法が大きく異なり、教師はそれぞれで教材研究をする必要があるのです。多くの先生から「実験の準備が大変」「実験が失敗するかもしれないので不安」



「天気に左右されることがあるので面倒」と言った意見を聞くのもそのような点に起因しているのではないかと思います。

今回の教育実践フォーラムは、東京都、横浜市の理科のプロ教師の講座を通してよりよい理科の授業のあり方を検討したり、理科が得意でない先生でも授業の参考にしたりできるように企画いたしました。先の結果からもわかるように、理科は「たくさん経験する」ことが重要です。今後も、教育系学部として先生方が交流できるよう企画していきます。

未来塾

「人間開発は人づくり」をモットーに！

今年もたくさんの「未来(みらい)塾」が開かれ、開講講座は13講座、延べ受験者数は471名となりました。

講座名	担当	開講回数と受講者数
講座1「ピアノ講座」 講座2「幼稚園実習対策ピアノ講座」 講座3「教員採用試験対策ピアノ講座」 講座4「保育士資格取得対策ピアノ講座」	高山 真琴 准教授	41回開講、延べ受講者数41名 31回開講、延べ受講者数31名 56回開講、延べ受講者数56名 25回開講、延べ受講者数25名
「柔道基礎力養成」講座	上口 孝文 教授	22回数開講、延べ受講者数185名
講座1「テニスの審判を目指して」 講座2「体育・スポーツ健康関連雑誌購読会」	一 正孝 教授	5回開講、延べ受講者数6名 10回開講、延べ受講者数15名
「泳げるようになろう講座」	原 英喜 教授	4回数開講、延べ受講者数12名
「臨海学校・遠泳プログラムの見学及び小遠泳体験講座」	原 英喜 教授 木村 一彦 兼任講師	千葉県南房総市 8月に1泊2日 受講者数3名
初心者 中級者のための 「体育的、集団宿泊の行事としてのスキーを学ぶ講座」	原 英喜 教授 木村 一彦 兼任講師	長野県山内町一ノ瀬にて2泊3日開講、 受講予定者数2名
「杖道・居合道実践講座」	阿部 弘生 助手	29回数開講、延べ受講者数75名
「保育教材研究講座」	山瀬 範子 専任講師	3回数開講、延べ受講者数15名
「わかる！できる!! 国語授業づくり講座」	吉永 安里 助教	5回数開講、延べ受講者数5名